

戦争を知らない世代へ 80年つなぐ平和のバトン

5月18日 平和コンサート 加藤登紀子 for peace 80億の祈り



市制施行20周年と戦後80周年を記念する安曇野平和コンサート（実行委員会主催）が豊科公民館で開かれました。シンガーソングライターの加藤登紀子さんがホールを埋めた約700人に平和への祈りを込めた歌を届けました。曲の合間に加藤さんは自身の生い立ちに触れ、「日本は戦争が終わった時に二度と戦争をしない憲法を持つ国となり、平和のバトンを80年守ってこられた。これからも美しい星を守らなければならぬ」と語り、全20曲を熱唱しました。



加藤さんのファンだという財津喜代子さん(81)は「加藤さんの歌は共感できることが多い。ウクライナなど世界で平和がおびやかされるようなことが多くて心配。母が話してくれた戦争の話の思い出し、平和が一番だと改めて感じた」と語りました。

また、会場ロビーにはウクライナの子ども達が描いた原画パネルも展示され、来場者は真剣な表情で見入り、平和の尊さをかみしめていました。



地域の魅力 かるたに込めて受け継ぐ

区民が地域の魅力をよみつくる七日市場かるた



七日市場の歴史を学ぶ会と同地区公民館が制作した同区の歴史や文化、自然を伝える「七日市場かるた」500セットが市制施行20周年に合わせて完成し、区内全戸に配られました。かるたが気軽に地域を知る機会になることを願い、令和5年から本格的に制作を開始。句を作るため地域学習の勉強会を開き、回覧板でも募集したところ、祭りやケヤキの木などを題材にした130句が32人から寄せられました。同会と公民館の関係者がその中から44句を選定。取り札には句にちなんだ写真、裏面には紹介文を載せるなど工夫しました。同会前会長の曽根原孝和さん(89)は「思いの詰まった作品ばかりで選定には苦労した。地域の皆さんと作り上げたかるたが、歴史や環境を知るきっかけになればうれしい」と話し、同区公民館長の望月武志さん(60)も「11月には完成を祝うかるた大会を予定している。将来にわたって受け継がれてほしい」と笑顔を見せました。

黒光が愛したオルガン 時代を超えて響く音色

6月14日 安曇野に息づく音楽の調べコンサート



研成義塾ゆかりのオルガンと歌のコンサート(井口喜源治記念館主催)が穂高交流学習センター「みらい」で開かれ、訪れた約170人が柔らかな音色に聞き入りました。ステージに登場したのは、井口喜源治の活動を夫・愛蔵と共に支援した相馬黒光が嫁入り道具として持参し、その後研成義塾に寄贈された足踏み式オルガン。製造から130年以上が経ち音が出ない状態でしたが、数年前に修復され音色が復活しました。



コンサートでは、オルガン奏者の杉本周介さん、ソプラノ歌手の原諠子さん、安曇野混声合唱団が「仰げば尊し」「早春賦」などを披露。観客と市歌を歌う場面もあり、会場は一体感に包まれました。訪れた中村寛治さん(78・池田町)は「小学校で弾いたオルガンの音が懐かしい。優しい音色と透き通った歌声に感動した」。合唱団長の野本貞子さん(77・穂高有明)は「音色が素晴らしく、共に歌えたことに感謝。来年は合唱団も創立20年。これからも安曇野で歌声を響かせたい」と話してくれました。

偉大なナチュラリストを追って 生まれる新たな可能性

8月10日 第7回田淵行男賞写真作品公募 表彰式



田淵行男の業績を後世に残し、山岳・自然写真の新人発掘を行う写真賞の表彰式と記念講演会が穂高交流学習センター「みらい」で開かれました。9年ぶりの開催となった今回は、全国から70人・97作品の応募がありました。

豪雪地帯の自然とそこに暮らす人を撮影したモノクロ写真が評価され田淵行男賞を受賞した中野陽介さん(38・福島県只見町)は表彰式で「受賞は大きな励みとなった。支えてくれた家族に感謝したい」と話し、受賞を喜びました。また、今回は新たな試みとしてジュニアの部を創設。野鳥が昆虫を食べる瞬間をとらえた作品でジュニアの部・安曇野市長賞を受賞した矢花沙織さん(15・明科七貴)は「受賞は信じられない気持ち。今後は風景写真にも挑戦したい」と意欲を高めていました。

その後の記念講演では、選考委員長の飯沢耕太郎さんが山岳写真から見える田淵が実践した自然との向き合い方を解説。参加者は生誕120年となる田淵の情熱に思いを巡らせ、講演に聞き入っていました。



市制施行20周年記念事業レポート
安曇野の未来に向かってチャレンジ